

群辞典をあわせた既刊の一二の辞典から、人物名を冠した六六九症候群について、延べ九〇五名の、人物名を主とする眼科症候群人名辞典の作成を意図して調査を始めた。それぞれの人物の略歴ならびに活躍地、専門分野、提出論文などについて、年代別の推移について考察したい。

(京都府京都市)

## John Hunter の歯科医学的業績

に つ い て

本 間 邦 則

John Hunter (1728-93) は外科医としてのみならずその解剖学的業績についても多く知られている。また彼の著作『The Natural History of the Human Teeth (1771)』は、『歯の博物学』は、歯科医学の進歩に大きく貢献した業績として知られている。彼の歯科医学における業績は、兄の Spence 一家が歯科医師であったので、その相談相手となり、研究した結果から得られたものだろうと推定されている。

Hunter の歯科医学的業績として注目すべきものは、埋伏した下顎智歯の歯冠周囲炎の観察と、歯槽膿漏症が歯槽縁からはじまり歯根部にむかって進行する状態を認めたことであろう。

歯の移植実験も行っている。これは十八世紀のイギリス

歯科界において、人から人へと歯が移植される技術が普及し、それは好もしからざる方法といわれていたことであった。Hunter は、人から人へと移植された歯によって悪い病気が伝えられることはないと言ったが、これは後に、多くの人によって伝染する病気、とくに梅毒についての誤解であると反論された。また、歯には血管の分布がないと考えた。顎の成長と歯の成長との関係についても適切に述べられている。

Hunter は歯に学名を与え、分類することを考えた。それは現在でも生きている。歯を縦断した研磨標本で観察される特有の縞模様を、発見者の名にちなみ「シュレーゲルの条紋」と呼んでいる。シュレーゲル Christian Heinrich Theodor Schreger (1768—1833) はドイツのハルレ大学教授で、一八〇〇(寛政十二)年に報告したのであるが、Hunter はすでにそれ以前に記載していることが知られているので、ヨーロッパではこれを Hunter-Schreger の条紋とも呼称する。ドイツのキール大学教授 Ferdinand Graf Spee (1855—1935) は、一八九〇(明治二十三)年に、下顎の切歯切縁・大歯尖頭・小・大臼歯頰側咬頭頂を結ぶ曲線は中

心を上にした円弧を形成することを報告した。それゆえに歯科医学界ではこれは Spee 彎曲と呼ばれ、義歯を製作するときに重要な役割をはたしているものである。これについて Hunter はすでに知っていたらしいのである。

Hunter の業績は、今日の歯科医学における見解とほとんど同じくするものが多い。これらについて考察を試みたいと思う。

(日本歯科大学新潟歯学部)